

## 沈金

沈金とは、漆を硬化させたものに細かい溝を彫り、そこに金粉や箔を充填して装飾する技法である。石川県の漆器の名声を支えている伝統的な装飾技法のひとつである。

この技法は、中国の宋の時代（960-1279）に生まれた。日本には室町時代（1392-1573）に鎗金（そうきん）が輸入され、京都の大徳寺の宝物館に現存するものがその例である。その技法を学んで取り入れた地元の職人たちが、やがて全国に広めていった。

沈金とは「沈んだ金」という意味で、固まった漆器に「沈金ノミ」という金属製のノミで線や点を彫り込んでいくものである。職人たちは、砥石を使い、刃先の形状を整えながら、自分だけのノミを作る。丸みを帯びたもの、角ばったもの、鋭く尖ったもの、粗いものなど、形状の違いや力の入れ具合によって、さまざまな効果が得られる。例えば、笹の葉のような先が細い形は、角ノミを使い、切り始めと切り終わりよりも、途中を強く押すことで作ることができる。竹程の直線的なラインは、刃先が少し曲がったナイフのような細い刃物で彫り、ピンポイントに削られたノミは、細かい部分や質感を加えることができる。漆は傷や失敗を修復することができないので、細心の注意が必要である。

彫り上げたデザインは、漆で薄く覆っていく。次に、伝統的な手作りの紙（和紙）で表面を拭き、余分な漆を吸収させ、溝の部分にほんの少し残していく。そして金箔または金粉を綿毛のようなもので叩いて塗る。金属は溝の濡れた漆にのみ付着し、しばらくして手のひらや指先で余分な部分を拭き取ると、漆地とは対照的にデザインが輝き出す。

銀やプラチナなどの金属を使い、色のバリエーションをつけることもできる。また、炭の粉などを重ねて、色を濃くしたり薄くしたりすることもできる。金属粉の代わりに朱漆や黒漆で彫文様を埋めるバリエーションもある。

沈金は1955年に重要無形文化財に指定された。石川県、特に輪島市との結びつきが強く、重要無形文化財保持者を数人輩出している。1955年に前大峰（1890-1977）、1999年に前史雄（1940-）、2018年に山岸一男（1954-）が認定されている。